



喜劇王・渋谷天外② 三善貞司 地域研究者

初代天外と舞台上上がる長男一雄
父亡き後、蛙の子は蛙で脚本に異色の才能を発揮

明治40年（1907）天才仁輪加師鶴屋団十郎の弟子鶴屋団治と曾我廼家箱王は、独立して「新生喜劇」という一座をたちあげ、京都の「朝日座」で興行を打ちます。

迷演・珍演のこっけい劇に客席はあほくさと言いながら笑いころげますが、朝日座の経営主白井松次郎と大谷竹次郎兄弟（のちの松竹創業者）は、「こらいける。助けたら」と以後のプロデュースをひきうけてくれました。

こうして団治は渋谷天外（初代）、箱王は中島楽翁と芸名を改め、一字ずつとって「楽天会」座を結成します。糸田通夫・宮島弁天・田村楽太・松尾天勝ら超個性派の喜劇役者たちは、いずれもこの座の出身です。

なかでも田村楽太は、戦後の映画史に残る傑作「夫婦善哉」（豊田四郎監督）に出演、淡路恵子が扮する蝶子の父親役を勤め、まさに神技だと評論家たちから絶賛された名バイプレーヤーです。そうです。織田作之助（本連載126〜128参照）の原作で、蝶子と逃げた男を森繁久弥が熱演して評判になったあの映画です。

楽天会の旗上げ興行は、「活動写真有声の錦絵」です。このころから日本の映画（当時の名称は活動大写真）は始まり、明治44年にはチャンバラスター尾上松之助（愛称・目玉のマッチャン）が登場して人気者になるのですが、もちろん白黒の小さい画面で、音声ひとつできません。それで天外はこんな題名をつけ、「こっちは声が出る。色もついとる。錦絵（木版の色刷り浮世絵のこと）みたいにきれいや」

と宣伝したわけです。舞台では大量の氷を砕いて天井から降らせ、雪景色のラブシーンを入れるなどの演出も工夫し、客を呼ぼうと涙ぐましい努力をしました。

「けっいたいな芝居やおもしろい」と話題になり、東京の「明治座」や名古屋の「御園座」でも興行。さあこれからやという大正5年（1916）突然天外は大量の血を吐いて倒れ、わずか35歳で死亡します。のちに二代天外を継ぐ渋谷一雄は、

「喜劇役者の末路は悲惨なもんや。さんざん人さまのことをからこうたり笑いにしたりして、メシを食ったむくいやる」

と昔を思いだし、父の死をこう語っています。そう言えば二代天外も、末路はまことに哀れでした。

大黒柱を失った楽天会は、まだ10歳だった一雄を孝行息子役に仕立て、なんとか同情を

集めて興行を続けますが、4年後の大正9年（1920）、今度は中島楽翁が病死します。楽も天もいなくなつた楽天会は、力折れ矢尽きてついに解散に追い込まれました。

ここから話は二代天外を継ぐ渋谷一雄に移ります。彼は明治39年（1906）、初代天外の長男に生まれました。

「父親は生まれて3ヶ月のわしを抱いて家をとびだし、祇園（京都市）でお茶屋相手に縫物してた女性のもとに押しかけた。横顔が美しい人で、8つになるまで面倒見てくれたさかい、ほんまの母親やと思つてました」

大きくなつてから一雄はこう回顧しているが、実の母は誰か知らない。

小学校に入った一雄の成績は抜群。父天外は大喜びで、どこで聞いてきたのか、

「お前は蔵前（東京）の高等土業にやつたるから勉強せえ。鉄道技師がむいとる。役者はあかんあかん」

と頭を撫でながらいふくめますが、舌の根も乾かぬ一雄が小学2年のときに、

「すまん。どうしても子役が要る。ちよとだけあがれ」

と舞台に立たされます。

「父親と兄弟役やつた。おにいちゃんと言つてこそ、お父ちゃんとやつてドヤされた」

と語る一雄は、舞台でしか父と会えなかつたそうです。浮気者の父は一雄を育ててくれた祇園の女性のもとにも帰らず、ほかの女たちの住居を転々として暮らしていました。

こうして楽天会も消滅し孤児になつた14歳の少年一雄は、道頓堀の芝居茶屋「岡島」にひきとられます。岡島の主人は初代天外のファンで、路頭に迷つていた一雄に、「ぼん、店でも手伝つか」と親切に世話をしてくれます。芝居茶屋とは、コヤ（劇場）に付属して客席の案内や飲食物を出す店のことです。

文章の大好きな一雄は、手伝いが終わるとなにかを書いてはひとりで笑つたり泣き真似をするけつたいな少年でした。あるとき「私は時計であります」という変てこな題の脚本を書き、はにかみながら読んでくださいと岡島の主人にさします。

駅の時計が9時、正午、3時、そして深夜を指すときに次々と奇妙な事件が発生し、それが複雑にかたまつてやがて大きなひと続きの流れになつて展開する、まことにふしぎな物語です。

「ほんまにお前が書いたんか」と感心した主人は、知りあいの喜劇役者で大御所の曾我廼家十郎に見せました。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞